

マサイ観光とジェンダー
—関係性からみる女性たちの多様性—

Maasai Tourism and Gender:
Rethinking the Representation of Women from Relationships and Gender Dynamics

大川 莉果
OKAWA Rika

キーワード：マサイ、観光とジェンダー、女性表象、民族誌分析

Keywords: Maasai, tourism and gender, representation of women, reexamining ethnographic works

1. 研究の背景と目的

本研究は、アフリカ観光を説明する上で欠かせないマサイを事例に、ジェンダーの視点からマサイ社会における観光（以下、マサイ観光）について考察したものである。具体的には、タンザニア北部のマサイ観光を描いた民族誌を再分析する作業をつうじて、観光研究において広くみられる女性表象およびジェンダー概念を批判的に検討する。

近年、ジェンダー研究は飛躍的に蓄積されている一方で、観光とジェンダーについて考察した研究は非常に少ない。また、そのわずかな研究を整理してみても、観光における男女の収入の格差や性別役割分業、女性が一方的に「見られる」側として消費される権力的不平等を主にホスト社会から批判的に検討したものが主流となっている。

たしかに、性を理由にした権力的不平等は、観光研究のみならずさまざまな分野から認められている。ホスト社会の女性の開発を訴えてきた先行研究は、ジェンダーを観光の変数として捉える立場や、人間関係とともに変化するダイナミックな概念として捉える立場が重要であるとしてきた。こうした研究成果は、アカデミズムだけでなく観光産業をきっかけとした女性のエンパワーメントや社会進出において大きな役割を果たしてきた。

しかし、こうした一連の研究は、裏を返すと、女性を「改善」すべき存在としか描いてこなかったということではないか。すなわち、既存研究はホスト社会の

女性を「受動的な弱者」として前提視して議論をスタートさせているのではないか。調査／研究する前の段階で、すでに女性を固定的なものとしてみているのではないか。

以上より、既存研究の開発論的女性表象を批判的に検討し、既存研究で用いられてきたジェンダー概念およびジェンダーの視点をマサイ観光の事例から刷新することを目的とする。

2. 研究の方法と手続き

研究方法は民族誌分析である。民族誌分析とは、既存の民族誌を再検討し、自らの視座あるいはテーマから再分析することを指すが、本研究では、オランダの人類学者 V. Wijngaarden による民族誌 *Dynamics Behind Persistent Images of "the Other": The Interplay between Imaginations and Interactions in Maasai Cultural Tourism* (2016) (以下、本民族誌) のマサイ観光をジェンダーの視点から再分析した。また、本民族誌の事例について彼女が撮影した民族誌映像 *Eliamani's Homestead* (2014) も補足的に使用した。

3. 研究の概要

本研究は、4つの章で構成されている。

第1章では、観光とジェンダーに関する研究をはじめ、ジェンダーがこれまでどのように定義され、使用されてきたのかを、文化人類学、ジェンダー研究の観

点から整理した。第2章では、マサイ社会でみられる性別役割や性にもとづく労働、通過儀礼を念頭に置き、マサイの文化的コンテクストを民族誌のデータから整理し、マサイ研究史における Wijngaarden の位置づけを確認した。

第3章では、本民族誌に描かれるマサイ観光をジェンダーの視点から再分析した。Wijngaarden は、マサイ女性の観光客へのビーズ細工販売を事例（以下、本事例）に、ホスト/ゲストの相互のイメージは観光を通してどのように変容するのかを考察した。本事例には、オランダ人夫婦とその息子と娘、ガイドのマサイ男性、ボマ (*boma*, 集落) にて生活するマサイ女性など複数のアクターが登場する。

Wijngaarden は本事例から、マサイからみれば、観光客は写真を撮りにきてビーズを買いにくる人であり、観光客からみれば、マサイは写真を撮られる人、かつそのイメージを売ろうとする人であると規定し、そこから両者の間には「物質的不平等」があることを見出している。

しかし、本事例をジェンダーの視点から再分析すると、マサイと白人観光客、マサイ女性と白人女性観光客、マサイ女性と観光客を仲介するマサイ男性、若いマサイ女性と若いマサイ女性、あるいは若いマサイ女性と年長のマサイ女性など、さまざまなアクターが重層的に絡みあっていることが分かった。

そこで本研究では、これらの社会関係をとりわけ (A) マサイ女性と白人女性観光客、(B) マサイ女性とマサイ男性、(C) マサイ女性とマサイ女性の3つに注目し、それらを具体的に検討した。

たとえば、(C) マサイ女性とマサイ女性を取りあげてみると、本事例からは、年長のマサイ女性が観光客にビーズ細工を積極的に売ろうとする若いマサイ女性を励ましている姿や、観光客の相手をする若いマサイ女性の周りにほかのマサイ女性が集まり、観光客の行動や心理について共有する姿、若いマサイ女性が観光客の反応が芳しくないのを察すると、マー語（観光客が理解できない現地語）を用いて観光客を嘲笑する姿、年長女性が周りの若いマサイ女性に観光客に騙されないようにするため忠告をする姿など、複数のインタラクションがみとれた。

したがって、事例 (C) よりいえるのは、マサイ女性の観光実践は多様であり、ビーズ細工を「売る」という観光客との金銭をめぐるインタラクションに協働

的に対処していることである。すなわち、事例 (C) を詳しくみると、マサイ女性内部にも複数の関係性があり、さらに彼女らのインタラクションは、「開発」や「二重の負担」といった開発論的文脈だけでは語れない要素が多分に詰まっていることが明らかになった。

事例分析の結果から、ホスト社会の女性を「開発」や「エンパワーメント」といった、いわば改善すべき「弱者モデル」から描くのは、複雑多様なはずの実践や他者とのインタラクションを見逃してしまい、彼女らの「被害者性」を強化することにつながるのではないかと考察した。

4. 結論

既存研究は、ホスト社会の女性たちのエンパワーメントを達成し、ジェンダーの多様性を訴えてきたにもかかわらず、「改善すべき女性」、「かわいそうな女性」、「貧しいなかでもキラキラとがんばっている女性」という一般に表象されるステレオタイプを再生産してきたのではないか。女性を社会・経済的に弱い存在と前提視しながら、「改善」すべき存在といった結論ありきの目的論的な枠組みから描いてきたことによって、女性を固定化してきたのではないか。これまで観光を「ジェンダーの視点」から研究してきた研究者らは、あらゆる事例を提示しながら観光における女性の社会・経済的な立場の「改善」を喫緊の課題として訴えてきたが、その研究成果は女性の立場を「改善」するどころか、逆に女性たちを既存のレトリックを用いて縛ってきたのではないか。

本研究は、既存研究のレビューおよび民族誌分析を通して、女性表象をめぐる以上のような課題を見いだしてきた。そして結論にあたる第4章では、ジェンダー概念を批判的に再検討した。

ジェンダーは、生物学的に決定される性とは別の社会的に構築される性差という一般的な意味を指すだけではなく、あらゆる社会関係によってその様相が異なり、ローカルだけでなく非ローカルな要因にも影響を受けるダイナミックな概念として定義できよう。ジェンダーの視点とは単に「(ホスト社会の) 女性」の目線に立っただけのごとをみるだけではない。人びとの文化的背景やインタラクション、関係性など複数の要素がどのように絡みあい、そしてそこでジェンダーがどのように構築されているのかを探ることである。■